

常微分方程式

Contents

1. 導入	1
1.1. 微分方程式とは?	1
1.2. この授業の目標	1
1.3. 注意	1
1.3.1. ノートにおける囲いの意味	1
2. 第一回講義(2024-04-09)	3
2.1. 常微分方程式	3
2.2. 初期値問題	3
2.3. 変数分離形	4

1. 導入

1.1. 微分方程式とは?

- 例 $f'' - 3f' - 4f = 0$ を満たす関数 f は?

解の例 $\rightarrow f(t) = e^{4t}, e^{-t}$

(正確な解は, $f(t) = C_1 e^{4t} + C_2 e^{-t}$ (C_1, C_2 : 任意定数))

- これまでに習った微分方程式の例(不定積分)

$\int f(x) dx \rightarrow$ 微分して $f(x)$ になる関数 $F(x)$ を求めている. つまり, $F'(x) = f(x)$ という微分方程式を解いている.

1.2. この授業の目標

扱いやすいいくつかの微分方程式(変数分離系, 定数係数線微分方程式)に対して手計算での解き方を学ぶ.

1.3. 注意

この授業では, x, y はたいていの場合, 独立変数を持つ(未知)関数を表す.

Example: $x' = \sin(x)$ ($x(t) = \cos(t) + C$)

また, $x^{(n)}$ で x の n 階微分を表す.

1.3.1. ノートにおける囲いの意味

Def. 1.1: 定義

数学の概念の意味や内容を定めたもの.

Th. 1.1: 定理

正しいことが確かめられた数学の主張のうち重要なもの.

Prop. 1.1: 命題

定理よりも軽い(重要度が低い)主張のこと.

Cor. 1.1.1: 系

定理の結論から直ちに得られる主張.

Example: 例

Proof: 証明

□

2. 第一回講義(2024-04-09)

2.1. 常微分方程式

Def. 2.1: $x = x(t)$ を未知関数とする.

$$F(t, x, x', \dots, x^{(n)}) = 0 \quad (F : n + 2 \text{ 変数関数})$$

という形の方程式を常微分方程式という.

Example:

1. $x'(t) = \cos(t) \iff x(t) = \int \cos(t) dt$

$$F(a, b, c) = -\cos(a) + C$$

2. $x'' + 2tx' + x = e^t$

$$F(a, b, c, d) = -e^a + b + 2ac + d \quad (a = t, b = x, c = x', d = x'')$$

3.
$$\begin{cases} x_1' = 2x_1 - 3x_2 \\ x_2' = x_1 - 2x_2 \end{cases} \quad (\text{連立微分方程式})$$

Def. 2.2: 常微分方程式が n 階の導関数を含み, それ以上の高階の項を含まないとき, n 階の微分方程式という.

2.2. 初期値問題

Def. 2.3: n 階の方程式 $F(t, x, x', \dots, x^{(n)}) = 0$ の解であって, $x(t_0) = a_0, x'(t_0) = a_1, \dots, x^{(n)}(t_0) = a_n$ (t_0, a_i は定数)を満たすものを求めることを(初期条件に対する)初期値問題を解くという.

Example: $x'e^{-t}$ の解は $x(t) = -e^{-t} + C$ (C : 任意定数)

⇓ 初期値問題

$$x' = e^{-t}, x(0) = 0 \text{ の解は, } x(t) = -e^{-1} + 1$$

この初期値問題においては $x(0) = 0$ が初期条件.

Th. 2.1: (解の存在と一意性)

初期値問題

$$F(t, x, x', \dots, x^{(n)}) = 0, \quad x(t_0) = a_0, x'(t_0) = a_1, \dots, x^{(n)}(t_0) = a_n$$

の解は (F がリプシッツ条件を満たすなら, t_0 の近傍で) ただ一つに定まる.

2.3. 変数分離形

Def. 2.4:

$$x' = f(t)g(x) \quad (f, g: \text{関数})$$

の形の方程式を変数分離形という.

Example: $x' = 2t \cdot e^x$ ($f(t) = 2t, g(x) = e^x$)

Prop. 2.1: g は 0 を値に持たないとする.

$$x' = f(t)g(x)$$

に対し, $h(x) = \frac{1}{g(x)}$ とし, $H(x)$ を $h(x)$ の原始関数, $F(x)$ を $f(x)$ の原始関数とする.

$$x' = f(t)g(x) \iff H(x(t)) = F(t) + C \quad (C: \text{任意定数})$$

Proof:

まず, $x' = f(t)g(x) \implies H(x(t)) = F(t) + C$ を示す.

$x' = f(t)g(x)$ かつ $g \neq 0$ より, $\frac{1}{g(x(t))}x'(t) = f(t)$

$$\int \frac{1}{g(x(t))}x'(t) dt = \int f(t) dt$$

$$\longrightarrow \int \frac{1}{g(x)} dx = F(t) + C_1$$

$$\longrightarrow H(t) + C_2 = F(t) + C_1$$

$$\longrightarrow H(t) = F(t) + C$$

よって, $x' = f(t)g(x) \implies H(x(t)) = F(t) + C$ が示された.

次に, $x' = f(t)g(x) \iff H(x(t)) = F(t) + C$ だが, $H(x(t)) = F(t) + C$ の両辺を t で微分すれば示される. \square

Prop. 2.2: y は常に正, もしくは常に負の値をとる連続関数とする. このとき, $h(x) = \frac{1}{g(x)}$ の原始関数 $H(x)$ には逆関数が存在する. そして, 方程式 $x' = f(t)g(x)$ の解は, $x(t) = H^{-1}(F(t) + C)$ と表される.